

最後の柿の実

狭い庭に、実のなる木が何本かある。キンカン、ウメ、種類を忘れてしまったミカン類。これらは奥さんが「実のなる木がほしい」と言うので、買ってきては植えたものである。ナンテンが三本。奥さんの実家に行ったときにもらってきて植えた。モモは、私の父が自分で食べた桃の種を植えて育てた苗木を植えた。父は亡くなったがモモは私の胸くらいの高さになっていて、毎年きれいな花と小さな実をつけるようになった。オリーブは、息子の嫁さんが結婚前にはじめて家に来たとき持ってきてくれた鉢植えを、一番陽当たりのいい場所に植えた。マンリョウは知らない間に庭の隅に生えていた。鳥が種を運んだのだろう。ウメは、場所を移動したら元気がなくなり半ばあきらめていたが奇跡的に復活した。それぞれの木にドラマがある。

そんな中で、実のなる木の王者はなんと言ってもカキである。富有柿の苗木を買ってきて植えたのだが、今では三メートルくらいの高さになり、たくさんの実をつけてくれる。正確に言うと、一年おきにたくさんの実をつけてくれている。

多い年は百二十くらいの実がつく。実が色づいた頃から、毎朝五個以内と決めて収穫としては奥さんに献上するのが日課になっていて、毎日食後のデザートになる。

毎朝収穫をしていくと、数が減っていくにつれて大きさと色合いが良くなり、味も良くなっていく。十二月に入って残り二十くらいになったとき、奥さんが「いちばん高いところになっている実は採ってはいけないよ」と言う。たくさん収穫できて私たちを喜ばせてくれたことへの感謝として、自然に返すために残しておくのだという。

そうこうして、とうとう最後の一個になった。葉はすべて落ち、木の一番高いところで日に日に熟して、十二月の青い空に浮かんでいるように見える。庭にやってくる鳥たちも遠慮したらしく、一週間ほどそのままであった。

ある日の朝、庭に出てみると最後の柿の実は食べられていた。よほど旨かったのだろう。見事な食べかたである。

さっそく奥さんに報告すると、「それはよかった、よかった」と、なぜか大喜びなのだ。た。